

# 就学前教育の学びを生活科学習につなぐ

## —生活科 9 項目の内容との関連から考察する—

田口 鉄久<sup>1</sup>

### 要旨

就学前教育と小学校教育との連携を図る必要性が求められている。小学校学習指導要領では生活科を就学前教育とつなぐ教科に位置づける。幼児が園生活を通して体験した多様な学びは小学校の生活科教育によって体系的な学びに整理され、他教科の学びにも生かされる。本研究では就学前の幼児の事例を検討することを通して、生活科教育ではどのような点に留意すれば充実した授業が展開できるか明らかにすることを目的とする。

就学前教育として取組んだ 9 事例を生活科 9 項目の視点で分析した結果、1.子どもに理解できる用語使用の必要性、2.子どもが語りたくなるような学習環境づくり、3.就学前の多様な経験を語り合う場の必要性、4.幼児期に体験した地域における活動の把握、5.祭り等の活動に参加し地域づくりに貢献すること、をはじめとした 9 項目の留意点を示した。

キーワード 就学前教育 小学校教育 連携 生活科授業 幼児期の体験

### 1. 研究の背景

#### 1.1. 就学前教育と小学校教育との連携

就学前教育の学びや生活を小学校教育につなぐ取組は今どこの学校・園、地域でも盛んに行われている。平成 29 (2017) 年 3 月に告示された保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領および小学校学習指導要領のいずれにおいても就学前教育と小学校教育の円滑な接続を求め、連携に拍車がかかった感がある。国は保育所、幼稚園、幼保連携型認定こども園が行う就学前教育に対して「幼児期の終りまでに育ってほしい姿」(文部科学省 a,2017:3) を共通に示し、小学校の教育に対しては「幼児期の終りまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫すること」(文部科学省 b,2017:21) を求める。

三重県および三重県教育委員会では平成 30 (2018) 年 3 月に「三重県保幼小の円滑な接続のための手引き—まなびをつなぎゆめをはぐくむ—」冊子を県内すべての保育所、幼稚園、認定こども園および小学校へ配布した。就学前教育と小学校教育との接続への取組を促すためである。具体的なカリキュラムの編成は園・学校に委ねるが、「接続期に育みたい子どもの姿」として「自立の芽生え、まなぶ力、豊かな心」(三重県および三重県教育委員会,2018:3)の 3 分野を示し、それぞれに 3~4 の下位項目を置き、これを共通の視点として各園・小学校で連携、接続を推進することを期待する。平成 30 (2018) 年度は「幼児教育推進事業」を、平成 31・令和元 (2019) 年度は「就学前教育の資質向上事業」を行い、実践園の取組を通して推進を図った。

このような取組は各地で行われている。例えば茅野市教育委員会では、幼児期に培う力

---

<sup>1</sup> こども教育学部幼児教育学専攻

として「生活する力」「かかわる力」「学びの力」をあげる。これが小学校教育の学びの三つの要素「自立、協働、創造」(茅野市教育委員会,2016:62-69)につながるとして、就学前教育におけるアプローチカリキュラムの実践、および生活科を中心とした関連的・合科的なスタートカリキュラムの実践を取上げている。

## 1.2. 連携の構造

連携は大きく交流と接続に分けることができる。交流と接続にはそれぞれに、3つの個別の取組があり、構造化すれば以下のように整理できる(図1)。いずれも重要な取組ではあるが今回は「教育の接続」の視点で考える。



図1 連携の構造 (筆者作成)

## 1.3. 教育の接続の考え方

教育の接続は「教育内容の接続」と「教育方法の接続」に分けて考えることができる。

例えば名張市においては文部科学省の事業委託として平成27年度からの3年間「幼児教育の推進体制構築事業」に取組んだ。そこでは接続カリキュラム「しっかりつなぐ育ちのバトンカリキュラム」を編成し「ことば→国語、かず→算数、からだ→体育、しぜん→生活、やくそく→道徳、つながり→特活・外国語活動」に接続するとして教科のつながりから考えた(名張市教育委員会,2017:11-25)。これは「教育内容の接続」を意識したカリキュラムといえる。

このカリキュラムとは別に幼児教育アドバイザーの配置・活動、幼児教育実践と小学校授業の研修交流を行った。その活動の一つ、授業実践として小学校教員の経歴をもつ「先生」が園で幼児を対象に「授業」を行った。無論幼児向けの取組であって内容は「保育」の色彩の濃いものである。これは「教育方法の接続」を意識した取組といえる。

## 1.4. 就学前教育と小学校教育をつなぐ生活科

生活科は就学前教育と小学校教育とをつなぐ教科として語られることが多い。両者の接続が重視される今、生活科が果たす役割は重要になっている。

就学前教育は遊びや生活を通して行われる体験の学びであり、生活科も「具体的な活動や体験を通した」学び(文部科学省 b,2017:122)であるところに共通性がある。また、「就学前教育として行う遊びや生活」および「生活科で取組む活動」はともに総合的であり、そこから得られる学びも同様に総合的であるところが共通する。それゆえ生活科は小学校の系統的、科学的に整理された他の教科をつなぐ位置にもある。

小学校学習指導要領では「小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動と

しての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと」（文部科学省 b,2017:21）と述べる。

### 1.5. 就学前の幼児の学びを整え、体系化する生活科教育

就学前教育の立場から生活科教育に期待することは以下の点である。

（１）就学前教育における体験を通じた学びは多様であり拡散的である。生活科においては單元ごとに計画的、段階的な学びを保障する。ここで児童に体系的な理解が促される。

（２）就学前教育においては協同の学びは限られた仲間の中で行われることが多い。生活科の授業では様々な立場の仲間・人とつながる中で、学びが深まり、確認される。

（３）幼児の場合の振り返りは限定的であり、体験的、印象的である。生活科においては児童の振り返りが一層重視されていて、児童相互の話し合いが活発に行われる。

### 1.6. 本研究の位置づけ

仙台市教育委員会は生活科を「幼児教育との関連を保ちながら教科を中心とした小学校での学びに徐々に移行させていくことができる」教科（仙台市教育委員会,2010:38）と位置づける。

本研究は保育所、幼稚園、認定こども園等で遊びや生活を通して培ってきた幼児の資質・能力が小学校入学後、生活科学習のなかで十分に発揮されることが期待されるためにはどのような点に留意して取組めばよいかを、事例を通して検証するものである。

## 2. 研究の方法

生活科は 9 項目の内容で構成される。9 項目とは「学校と生活」、「家庭と生活」、「地域と生活」、「公共物や公共施設の利用」、「季節の変化と生活」、「自然や物を使った遊び」、「動植物の飼育・栽培」、「生活や出来事の交流」、「自分の成長」である（文部科学省 c,2018:24-27）。

幼児期の遊びや生活を通して、幼児が生き生きと活動し、学ぶ姿が記載された 9 事例を生活科 9 項目と関連付けて分析・考察し、生活科授業の中でどのように生かすことが望ましいのか検討する。事例はそれぞれの記録者に使用の了承を得たものである。

## 3. 研究の結果

### 3.1. 「学校と生活」について

この分野では安心して学校生活が始まるために学校のことを知ると共にそこに関わる人々のことも学ぶことになる。

幼児は入学以前からすでに学校訪問をしたり、児童との交流を持ったりしている。以下は 1 年生の授業に参加した 5 歳児の様子である。

事例 1 「宝物発表」（M 市 N 幼稚園、2016. 7、5 歳児、M. K 教諭の事例/部分）

教室では各グループの小学 1 年生が順に自分の宝物を発表し、グループ内の児童が質問をしたり感想を伝えたり

する。小学生 A が「何か質問ありますか」と聞くと幼児 B は「ない・・・」と答える。小学校教諭が「きっとドキドキしていると思うの、そのぬいぐるみで“ちょん”としてみてごらん」と言い添えると、小学生 A は優しくぬいぐるみを B に付けた。幼児 B はくすぐったそうに笑ったのをきっかけに、その場の雰囲気は和んだ。小学生 C が「何か感想ある？」と聞くと幼児 B は何も言わない。小学校教諭が「感想っていう言葉、わかるかなあ」とつぶやくと、小学生 C は気が付いたように幼児 B の顔をのぞき込みながら「あんな、感想っていうのは、かわいいなって思ったら『かわいいです』って言って、質問っていうのはわからないことを聞くんやよ、わかった？」と丁寧に説明した。その後幼児 B も小学生の宝物を手にとって眺めたり、他児童の説明を聞いたりした。

### 考察 1

幼児は小学校へ入学することに大きな期待をもつ一方で、教室・先生・児童のことを含め、学校生活や授業の実態は理解できていない。生活科または関連授業としてこのように幼児も参加する取組を行うことは入学する幼児の安心や期待につながるるとともに、学校生活を紹介する小学生児童の学びにもつながる。

多くの園では小学校との連携を図る取組みの一環として小学校を訪問して、授業体験をしたり、児童による学校案内等を体験したりする。園児ともっとも近い年齢の 1 年生であれば気持ちが通じ合い易い。同一園で過した経験があるなど親しみがもてる場合もある。

配慮すべき点としては、小学校では授業で普通に使われる用語であっても幼児には理解できないことが多い。入学初期においては分かり易い語りかけが求められる。

### 3.2. 「家庭と生活」について

幼児は保護者・家族に見守られ、安心して家庭生活を送り、社会生活の基本となる力を身につける。日々の生活においては生活習慣を身につけ意欲的な生活態度や人を思いやる心を培う。自分を支えてくれる保護者・家族への思いは深く強い。

#### 事例 2 「昼食時の会話」(Y 市 M 幼稚園、1996. 5、5 歳児、S. K 教諭の記録/部分)

R 男「ぼくな、おいだされたことあるでー、ほんで T 男くんとこいたら もうねとったでな、ぐるっとまわったん。ほんでな、おにいちゃんな、はだして とびだしてきたんやで」 保育者「R 男くんを心配して探してくれたんやね。なんで追い出されたん？」 R 男「あたま あらわなんだでな、おいだされたん」 K 男「ハハハハハハ」 Y 男「ぼくな、ごはん たべやなんだでおいだされたで」 K 男「おれなー、かえるのがおそかったらなー、『でてけー』っておいだされたんやで」 N 男「おれもなー、あるでえ」 K 男「N 男くん どんなときにおいだされたん？」 N 男「あんな、ごはんのときマンガみとったもんでな、『N 男！ワーワーワー』っておいだされたん」 R 男「みず つかわん シャンプーあるで」 保育者「えー、お湯かけんと 洗うの？」 R 男「うん！（ぬれた）タオルでふくの」 K 男「うん、おれもするでー じかんないとき」 保育者「えー！」 U 男「U 男もするでー」 保育者「えー、U 男くんも！」

### 考察 2

幼児の家庭における生活をめぐる豊かな会話である。これらの会話は昼食時に交わされている。幼児は家庭で保護者・家族に支えられて日々生活を重ねる。しかし、小学校で授業として行われる場面での発言は、第三者にも伝わるように要点を整理して順序だてて語らなければならない。思いを語ることのできる生活背景はあっても、そのことの要点をまとめて語るには躊躇せざるを得ない。岡本夏木のいう「二次的ことば」への移行期の大変さ

でもある（岡本，1993：50－52）。この点について就学前教育の立場からいえば、楽しい雰囲気の中で、その子自身の話の流れを大切に、対話的な語りの場をつくる必要がある。子どもは教師と対話するように生活を語ることができると良い。

### 3.3. 「地域と生活」について

幼児は家庭や園の生活を通して様々な力を身につけて成長するが、それを取り巻く地域の影響も強く受ける。地域には自然や物（野山川海、植物、生き物）、人的資源（地域の人々）、社会資源（特産、産業）、文化資源（歴史、行事、祭り）などがある。就学前教育としてこれら地域の資源を保育に取り入れて、幼児と共に豊かな経験をすることがある。

事例3 「魚市場へ出かける」（S市H幼稚園、2019.6、5歳児、T.Y教諭の事例/部分）

魚市場で働く人から近海で獲れる魚の話聞いた。魚に触らせてもらった後、タコをかごから出し、地べたを這わせてもらった。A・Bは「にゆるにゆるや！」「指にくっついてきた！」と吸盤に興味を示す。触り続けていると、白っぽかったタコの体がだんだんと赤くなってきた。C「なんか色がかわってきた！」と言う。魚市場の人はにっこり笑って「こっちは怒っとなや。あんたらがな、触りすぎたやろ、そんで怒っとなやわ」と教えてくれた。

翌日は魚屋へ出かけた。売られているタコを見つけ、C「あ、これくちや！ここからスマはくんやで」と言うと、店の人が「違う違う、スマは違うんやわ」と別の生きているタコを持ち、頭のところをめくり「スマはここから出るんや」と尖った部分を見せて教えてくれた。

#### 考察3

地域の産業と関わって働く人々との交流を通して幼児は地域の様子や地域の人々への関心をもつ。地域で農業に従事する人と作物を一緒に育て、収穫して、食べる園も多い。園においては地域の資源（人も含む）を活用して保育内容化するところが多い。園生活の経験の上に立って生活科の授業展開に工夫を図る必要がある。数園から小学校へ入学している場合などは、多様な取組みから得た体験を伝え合うことも有効である。

### 3.4. 「公共物や公共施設の利用」について

地域には住民・子どもの命を守る施設がある。消防（分）署や交番などである。幼児は避難訓練や交通安全などの取組に関わって、訪問したり園へ来てもらったりする。実際に消防車や救急車を見ながら、名称を覚え、その役割についても学ぶ。地域での合同避難訓練に参加したり、起震車体験をしたり、交通安全教室などにも参加している。

ここでは幼児と保護者が地域の児童館を訪れ、親子で作品作りに取組んだ事例をあげる。

事例4 「地域の児童館へ行き、親子で制作をする」（T市K幼稚園、2018.7、4・5歳児、Y.F教諭の事例/部分）

毎年7月に地域にある児童館に親子で出かけ、親子陶芸教室を行っている。何種類もあるフォトフレームの型紙から好きなものを選び、児童館の職員に作り方を教えてもらいながら粘土でフォトフレームを作る。作り終えた後は窯で焼いてもらう。文化祭へも出展する。

当日は外国につながる4歳児のCは、母親に手をとってもらいながら、慎重に粘土ペラを使ってパンダの形をとっていた。Cは久しぶりに母親が仕事を休んで来てくれたこともあり、母親に抱きつくように甘えるしぐさをして、嬉しい気持ちを表していた。保育者は「ママ、粘土ってしたことある？」と尋ねると「ない。でも作るの好きよ。楽

しいね」と夢中になって作っていた。イメージがわくようにと、児童館の職員が出来上がったものを見せてくれると、完成のイメージがわいた様子でCと共に作るパーツを決めていた。職員に「上手に作れたね」と声をかけてもらい、Cは嬉しそうであった。

#### 考察4

K園は小規模なこともあり、地域の施設等との交流を大切にする。地域の商店に園児が描いた絵を貼ってもらい、園児も訪れて店の人と話をする取組や、この後事例5に記載するみこしパレードで地域を練り歩く取組なども行う。このように地域内の公共施設や公園などを訪れることが多いが、園によっては公共交通機関を利用して博物館、美術館、プラネタリウム、児童公園などを訪れる経験をする。幼児は安全に気をつけることや見学のマナーなどについても分かっている。生活科授業においてはすでにこれらのことを学んだことがあるとの理解の上に立って、振り返りの中で安全や公共のマナーなどを考えさせる配慮が必要になる。

### 3.5. 「季節の変化と生活」について

小学校学習指導要領では「身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動」から学ぶことを示す。園でも教育課程・保育課程等の全体計画、月案・週案等の指導計画に季節の活動や行事を位置づけて取組んでいる。幼児は自然の持つ魅力や不思議さに新鮮な感動をもって意欲的に関わる姿がある。園内の花壇では花を、畑では野菜を育て、草原・樹木に来る虫を捕まえたり観察したりする。時に園の外へ出て、自然の中での活動を行ったり、地域で行われる季節の行事に参加したりする。

#### 事例5 「地域のみこしパレードへ参加」(T市K幼稚園、2018.10、4・5歳児、Y.F教諭の事例/部分)

毎年10月には自分たちで作ったおみこしを担ぎ、地域を練り歩きながら近隣の保育園と合流した後、地域の集会所や老人施設に立ち寄って、踊りを見てもらったりふれ合い遊びをしたりして交流をもつ。

昨年の経験があるDは「今からパワーだすよ!」と今年は年長組がみこしを担げることもあって張り切っている。Eは「みんな“かわいい”って言ってくれるかな」と楽しみにしている。法被に着替えたり、鉢巻を頭に巻いたりして準備を進めた。

5歳児がみこしを担ぎ、4歳児はすずを鳴らして出発した。F「私いつもここの道、歩いているよ」と嬉しそうに言う。保育者「Fちゃんの家におうちの人がいるかな? 外へ出てきてくれるといいね」と言うとGが「わかった、Fちゃんの家近くなったら、もっと大きな声で“わっしょい!”って言ったらいいな」と言う。

家の近くへ行くとFの母と祖母が待っていてくれた。Fは嬉しそうに笑顔で手を大きく振りながら、大きな掛け声で進んで行った。民生委員さんも駆けつけて励ましてくださった。途中で保育園と合流し集会所へ向かった。たくさんの方が出迎えてくれた。

#### 考察5

幼児にとって季節の行事や地域の祭りは楽しみの日である。子どもの日、母の日、七夕、七五三、お正月、節分、節句など季節ごとの行事を園で行ったり、家族と共に家庭で行ったりする。地域でも祭りや行事がある。日本古来の心を大切にしたい美しい伝統であり、家族や地域の絆を深めるものである。時代の流れと共に伝統的な行事や祭りへの関心が薄れようとする現代、園や学校も共に盛り上げる役割が求められる。

### 3.6. 「自然や物を使った遊び」について

幼児は身近な物を使って皆と楽しみながら遊びを作り出す。保育者は幼児と共に遊びながらより良い遊び環境を作り出そうとする。

事例6 「広い家を作る」(K市K幼稚園、2017.5、5歳児、S.E教諭の事例/部分)

数人の幼児は毎日のようにソフト積木で周りを囲み、家にして遊んでいる。この日もAたちは家を作った。広くてみんなが入れる家を作ろうとしている。G「ねえ先生、ダンボールもって来てくれた？」と聞く。保育者「もってきたよ。どれくらい大きなのがいい？」と聞くとG「これくらい」とソフト積木の煙突の高さを示した。(前日電気屋さんからもらってきた)大きなダンボールが畳んであるところへ行き、皆で一緒に保育室へ運び、組み立てた。

Gはダンボールカッターを持ってきて、興奮気味に入り口を切ろうとするが、保育者「どんなドアにするか皆で決めなくちゃ」と言うのでG「こうやって四角の中を切るんだよ」と指でなぞった。Gは「そうか」と言い、鉛筆を持ってきて描いた。一辺は開いたり閉じたりするために切らないことも話し合った。G「あっ」とひらめいたようでG「目打ちとものさし」を持ってきて折り線をつけ、開き易いドアにした。

その後も皆で相談しながら三角の屋根を作ったり、ひさしをつけたり、開け閉めのできるひだを入れたカーテンをつけたりした。ソフト積木の家とつなげて多くの幼児が入ることのできる家を作った。このおうちごっこは1ヶ月あまり続く遊びになった。

#### 考察6

幼児は遊びの中で遊びに必要な物をつくる。それは個人の物であったり仲間と共に楽しめる物であったりする。その物をつくるためには、自由に使える材料・素材と用具が幼児の身の回りにおかれている必要がある。そして共に考える仲間や保育者がいて、たっぷりの時間が保障されることが必要である。この遊びは1ヶ月あまり続いた。全く同じ遊びが続くのではなく、遊び方や遊びの環境は少しずつ充実し豊かになっていく。保育室にあるダンボールの家は、幼児のもう一つの“家”であったと考えられる。

子どもが興味をもった活動は1限の授業で終わるようなものではなく、少しずつ形を変えながら、遊び仲間も入れ替わりながら変化する。このプロセスを通して子どもの発想による工夫やアイデアが生まれる。

### 3.7. 「動植物の飼育栽培」について

動物を飼ったり植物を育てたりする活動を通して、育つ場所、成長の様子に関心を持ち、生き物への親しみをもつようになることが小学校学習指導要領にも示されている。

事例7 「あっ！チョウチョになっている！」(I市K幼稚園、2018.5~6、5歳児、N.E教諭の実践/部分)

5/30 A「毛虫がいるよ！ムカデかな？」 保育者が害虫ではないことを伝える(事前にツマグロヒョウモンの幼虫であることを把握済み)。

B.Cが皿や小枝を持ってきて捕まえた。この日は2匹捕まえた。B.C「もおうおらんかな〜」「何食べるんやろ？」と探す。保育者「どこにいた？」と聞くと、 B「お花のとこ」 C「パンジー」と答える。

観察ケースにパンジーを入れて「きれいな色やな」「とげとげみたいなもん出とるな」(絵を描く幼児、図鑑で調べようとする幼児がいた) 保育者はインターネットでチョウの姿を調べて幼児に伝えた。

5/31、6匹の幼虫を見つけて観察ケースへ入れた。1匹がサナギに変態していた。6/4、5匹がサナギに変態してい

た。6/5、6匹目のサナギを見つけた。6/7 背中を光らせたサナギを見て喜び、スケッチブックに描く幼児がいた。

以下の会話があった。6/11、幼児「あっ！チョウチョになっている！」「見せて」「2匹もいるよ」「ちゅうりっぷぐみさんに教えてこよ」「放していい？」、保育者「まだ見ていない子がいるから待ってくれる？」、幼児「うん」。

手に止まらせて可愛がる子、C「チョウの絵も描けるよ」と描く。羽化はその後6/18日まで続いた。虫を避けることの多かったEも興味を持ち、触ることができた。

### 考察7

野菜を栽培して収穫することや、園の自然に集まる虫や生き物を観察したり育てたりすることは幼児にとって魅力的な活動である。事例7は毎年パンジーの葉にツマグロヒョウモンの幼虫が出ることを知っている保育者が幼児と共に“わくわくした気持ち”を観察する取組である。幼虫、サナギ、成虫へと変態する様子を驚きながら見つめる幼児の姿が想像できる。TVや図鑑、教科書で学ぶのとは異なり、実体験を通じた感動を伴った学びであり、真の学びとも言える。

### 3.8. 「生活や出来事の交流」について

「人とのかかわりが希薄化している現在、よりよいコミュニケーションを通して情報の交換をし、互いの交流を豊かにすることが求められている。特に生活科においては、児童が、身近な幼児や高齢者、障害のある児童・生徒など、多様な人々と触れ合うことを大切にしている」と学習指導要領解説生活編で述べる（文部科学省 c, 46）。

園では年配者、地域の人々、小・中・高校生、小さな子や保護者等との交流に努める。

#### 事例8 「地域にある介護施設での交流を通して」（M市I幼稚園、2019.10、5歳児、T.S教諭の実践/部分）

毎年年長児と年中児が地域にある通所型の介護施設に訪問し交流をしている。利用者さんへの首飾りのプレゼントを作って、路線バスに乗って出かけた。途中、地域の人に会って「おはようございます」と幼児からあいさつをしたり、「どこに行くんですか」と尋ねられ「〇〇かいごしせつ～」と伝えたりする姿があった。施設に到着すると窓から利用者や職員の方が手を振って出迎えてくれた。幼児も大きく手を振り返したり「おはようございます！」と大きな声であいさつをして喜ぶ姿があった。

幼児は並んで利用者の前に立ち、大きな拍手を受けた。誇らしげに、元気よく運動会でしたソーラン節を披露した。踊っている間も手拍子と掛け声で踊りを盛り上げてくださった。その後利用者とペアを組んで曲に合わせて肩たたきのふれ合い遊びをしたり、傘の中にお手玉をシュートするゲームをしたりした。幼児が歌をうたった後、首飾りのプレゼントを利用者の首にかけると涙する人もいた。

帰り道「おじいちゃん、かわいいなあって言ってくれた」「おばあちゃん泣いてたな～」「うれしかったのかな～」などと幼児同士で話したり保育者に伝えたりする姿がみられた。

### 考察8

このような形でお年よりの施設や公民館等で行われるお年寄りの集い等を訪問する活動をする園も多い。河合隼雄は「子どもの宇宙」で子どもと老人の親近性について述べ、両者互いに「導者」の関係にあるとする（河合、1996:133-154）。子どもはお年寄りの無条件の優しさや知恵から学ぶ。一方でお年寄りはお年寄りの生き生きした姿、可愛らしさに接し、生命の喜びを感じる。子どもの豊かな感性や発想からも学ぶこともある。

人と関わる活動は相互の育ちを促す。多様な人々とのつながりが薄れようとする現代、

幼児期に行うこのような活動を生活科教育の中でも発展的に継続することが求められる。

### 3.9. 「自分の成長」について

幼児は大きくなることに憧れ、大きくなったことを誇りに思う。園で誕生会を祝ってもらおうと、1歳大きくなったことを実感し、クラスの中でもお兄さん・お姉さんになったと喜ぶ。いつも前を向き、振り返ることはない。

支えてくれた人々（幼児の場合は保護者や家族）について振り返って感謝することは難しい。母の日や父の日、敬老の日などには保護者、祖父母への感謝の気持ちは表すが、今まさに“お世話になっている自分”を客観的に振り返り、感謝することは自己中心性の思考過程にある幼児にとっては少々難しい。しかし、自己のこれからの姿を見ることによって「成長」を実感することは可能である。次の事例はその姿を示している。

事例9 「隣接小学校の1年生と一緒に出前授業に参加して」（M市N幼稚園 2016.6、5歳児、K.M教諭の実践/部分）

小学校1年生はN幼稚園から就学した子も多い。5歳児は前年度の年長児の姿も記憶している。この日“1年生”として園へ来て、5歳児と一緒に出前授業を受けた。内容は環境活動と環境学習センターの先生の話であった。

降園時、楽しかったことや環境学習の話をする中で、保育者「小学生の子たち、前の年長さんもおったなあ」と話すとA「うん、まえのきく組さんすごかった」と話す。保育者「何がすごかったのかなあ」と尋ねると、しばらく考えてA「よろしくお願いしますとか言った」保育者「そやなあ、みんなは〇〇です、って言ったよな。でも1年生の子は名前を言った後に『よろしくお願いします』って言ったなあ」「名前の前に何か言っていたの気付いた？」すると「ん？」と考えていた。保育者「僕の名前は、私の名前は・・・って言ったの気付いた？」と話すとB「ア一、言っとったー」C「知っとる、知っとる」、D「なんかすごかったー」と話す。保育者「すごいなー、何がすごいんやろなあ」、A「なんかちょっと違った」、D「まえきく組のとき一緒に踊ったときはあんなんじゃなかった」B「うん、違った」保育者「どんな感じ？」、A「ええ感じ」

保育者「なんでいい感じなんだろう」E「勉強しとるからやよ」B「学校いっとるよ、国語とか算数しとる」C「お母さんみたいな字書いとるでじゃない？」保育者「そうやなあ、いっぱい勉強しとるんやなあ、どうやって勉強しとるんやろ」その後、小学校の授業を見せてほしいことを手紙に書き、小学校へ届けに行くことになった。

#### 考察9

幼児にとっての成長は何にも増して嬉しいこと。日々成長を実感しながら生きている感すらある。小学1年生の姿について語り合いながら、自らもあのように成長していく姿に期待しているようにも思える。学習指導要領解説生活編では「自分自身の生活や成長を振り返る」（文部科学省 2018：49）とあるが、1年生の後半、2年生の後半だからこそできる活動と思われる。

## 4. 結果のまとめと今後への課題

幼児期に取組んだ活動を12事例掲げ、生活科9項目に分けて検討した。事例を考察した結果、生活科授業で生かすべき9点を明らかにした。

- (1) 入学当初は児童が理解できる用語の使用に心がける。
- (2) 児童が自身の生活を語りたくなるような安心できる学習環境をつくる。
- (3) 幼児は地域とのつながりの中で多様な体験を積んでいる。いくつかの園から来た児

- 童で構成されるクラスの場合、多様な経験を語り合うことを大切にする。
- (4) 幼児期に体験した地域における活動を把握したうえで、発展的な活動を工夫する。
  - (5) 園・学校は地域とつながる活動を共に盛り上げ、地域づくりに貢献する。
  - (6) 児童の興味をもつ活動は児童のアイデアを生かしながら継続・発展させる。
  - (7) 授業では結論に導くことを急ぐのではなく、子どもらしい発想や考え方を大切にして、長期的な見通しの中で学ぶことを大切にする。
  - (8) 多様な人との関わりの中で学ぶことを幼児期－児童期と引き続き重視する。
  - (9) 自らの生活や成長を振り返り考えることは児童だからこそできる。自分の育ちを支えてくれた人々への感謝の気持ちを生活科授業の中で育てることには大きな意味がある。
- 今後への課題は、就学前教育、生活科学習を通じた学びが小学校の他教科とどうつながるのかを検討することである。

## 引用文献

- 茅野市教育委員会（編）木村吉彦監修「育ちと学びをつなぐ保幼小連携教育の挑戦『実践 接続期カリキュラム』」（2016.1）、ぎょうせい、62-69
- 河合隼雄「子どもの宇宙」（1996.6）、岩波新書、133-154
- 三重県および三重県教育委員会「三重県保幼小の円滑な接続のための手引き－まなびをつなぎゆめをはぐくむ－」（2018.3）3
- 文部科学省 a「幼稚園教育要領」（2017.3）、フレーベル館、6
- 文部科学省 b「小学校学習指導要領」（2017.3）、東洋館出版、21, 21, 122
- 文部科学省 c「小学校学習指導要領解説生活編」（2018.2）、東洋館出版、24-27, 46, 49
- 名張市教育委員会「しっかりつなぐ育ちのバトンカリキュラム」（2017.2）、11-25
- 岡本夏木「ことばと発達」1993.7、岩波新書、50-52
- 仙台市教育委員会（編）木村吉彦監修「スタートカリキュラムのすべて－仙台市発信：幼小連携の新しい視点」（2010.11）、ぎょうせい、38

## 参考文献

- 日本生活科・総合的学習教育学会、学会シンポジウム 2019「令和の時代を切り拓く教育！－生活・総合を中心とした平成の教育を総括する－」レジメ（2019.11）
- 日本生活科・総合的学習教育学会「生活科・総合の実践ブックレット」（2013.9）
- お茶の水女子大学附属幼稚園、小学校「子どもの学びをつなぐ」（2006.2）東洋館出版
- 佐々木宏子、鳴門教育大学附属幼稚園「なめらかな幼小の連携教育」（2005.2）チャイルド本社
- 渋谷一典「低学年教育全体の充実に向けた生活科の役割」をはじめとした解説、論説、事例、文部科学省教育課程課他編『初等教育資料』（2019.7）
- 篠原孝子、田村学編著「幼稚園・保育所と小学校の連携ポイント」（2009.12）ぎょうせい

**Primary School’s “Life Environment Studies” as  
an Extension of Preschool Education  
– An Analysis of the 9 Objectives of “Life Environment Studies” –**

Tetsuhisa TAGUCHI

**Summary**

We need to acknowledge the necessity for a plan coordinating primary school education to preschool education. The subject of “Life Environment Studies” is already considered as an extension of preschool education in the government curriculum guidelines. The knowledges acquired by preschoolers through a variety of experiences in kindergartens are already supposed to be systematized in “Life Environment Studies” and put in relation to other subjects taught in primary schools. Based on an analysis of concrete learning experiences of preschoolers, this paper aims to show which elements should be emphasized in “Life Environment Studies” in order to improve the general content of this particular subject.

The result of our analysis based on a comparison between 9 types of experiences in preschool education and the 9 objectives of “Life Environment Studies” show that we should emphasize the followings: 1. Use vocabularies understood by children, 2. Create environments where children feel comfortable expressing themselves, 3. Let children talk about their preschool experience, 4. Understand their experiences in local communities during their preschool years, 5. Encourage participation in festivals in local communities.

Key word   Coordinating   primary school education   preschool education  
                  Life Environment Studies   personal experiences of preschoolers